

ナチユラルキス2

目次

ナチュラルキス2

5

ハートは甘い桃色

315

ナチユラルキス2

1 ためになる教え

「いったいいつ、こんなの買ったの？」

姿見の前に立った榎原沙帆子は、後ろに立って娘の姿を検分している母親の美美子に問いかけた。

「金曜日よ。ぴったりじゃない。いい感じよ」

そうは思えなかった。冷静に見る限り、いまいち似合っていない。

今日は、彼女の副担任である、佐原啓史の両親の家に挨拶に行くことになっている。

なんと佐原の結婚相手として……

彼女の首元のチェーンには、佐原が買ってくれた婚約指輪が下がっている。けど、沙帆子と佐原の関係は、とても微妙なものなのだ。

だって、ふたりは恋人同士だったわけではない。親しく話をしたのは、結婚することが決まったバレンタインデーの日が初めてで、それからまだ二週間経っていないのだ。

父親の仕事の都合で、沙帆子が突然引っ越さなければならなかったのがこの始まり。

引越しながらしたくなかった彼女は、副担任である佐原に、思わぬ成り行きで相談したのだが……

それがなんでか、結婚なんて話になってしまったわけ……

もちろん彼女は結婚を嫌がってなどいない。それどころか、佐原との結婚なんて夢のような話。

沙帆子はずっと前から佐原に恋をしていて……側にいさせてもらえるだけでしあわせなのだ。それでも彼女は、この成り行きをまだ受け止めていないし、どんな結婚話が進んでいくことに不安を感じてならない。

なんといっても、佐原の気持ちだが、彼女には皆目わからないわけ……

佐原先生はいったい何を考えているのか？ わたしのこと、どう思ってるんだろう？ 結婚なんてしちゃって、ほんとにいいんだろうか？

沙帆子は鏡の中の自分を見つめて、思わずため息をついた。

佐原は、彼の両親に、結婚する相手が高校生だということを伝えていない。彼女が高校二年生だとわかったら、結婚を反対されるかもしれないし、内緒にしておいたほうがいいのではと、沙帆子の母が佐原に提案したのだ。考えた末、佐原もそのほうがいいと結論を出したようだった。

そんなわけで、沙帆子が少しでも年上に見えるようにと、母はこの大人っぽい服を用

意してくれたのだろうが……

襟元に上品なフリルのついたグレーのシャツブラウスに、黒いスリムなスカート、そして淡いグレーのシックなカーディガン。

わたしの顔、どう見ても浮いて見えるよね……

「ママ、この服大人っぽすぎないかな。なんか、ひどく無理があるっていうか……」

「いまはね」

そう言っただけの含み笑いを零す母に、沙帆子は眉を寄せた。

「いまはねって、どういうこと？」

「いいから、こつちいらつしやい」

母は沙帆子の腕を掴み、彼女の部屋を出て、両親の寝室に連れていった。

寝室に、父幸弘の姿はなかった。たぶん居間にいるのだろう。結婚を手放して喜んでいるわけではない父は、朝、顔を合わせてからずっと不機嫌状態だ。

昨日は佐原とともに結婚式を挙げる教会を下見に行っただけで、不機嫌ながらも佐原の存在を受け入れているように見えたのに、一晩寝て起きたら、やっぱり結婚など反対という気持ちに逆戻りしてしまったのだろう。だが、いままらおおっぴらに反対できず、割り切れない思いを抱えているに違いない。

「座って」

鏡台の椅子をさしている母に、沙帆子は首を傾げた。

「ママ、何するの？」

「お化粧するに決まってるじゃない」

「お化粧するの？」

美美子は返事をせず、化粧しやすいように沙帆子を自分のほうに向けて、椅子に座らせた。

リップくらいなら、お出かけのときにつけたりしているが、本格的な化粧をするのは、これで三度目だ。これまでの二度は、どちらも秋の学園祭のとき。

一年生のときは、ステージ発表で、コミカルなオリジナルの劇をやった。たっぷり化粧を施された沙帆子に与えられた役は、パーティー会場の場面で、壁に背をつけて佇んでいるだけの、台詞ひとつない端役だった。それでも、二度と体験したくないほど緊張させられた。

二度目の二年生のときは、メイド喫茶なるものをやることになり、女の子たちは、これまた派手に化粧をして手作りメイド服を着なければならなかった。

そういえば、あのとき……佐原先生と、ぶつかって……

メイド服を着た格好でパネルを持ち、メイド喫茶の宣伝に校内を回る役を、じゃんけんで決めた。けれど、負けてやらねばならなくなった子たちが、そんなの見世物になる

みたいで恥ずかしいと言って泣き出したのだ。泣き出した彼女たちを責める声が飛び、やめなよと沙帆子の親友である飯沢千里と江藤詩織がみんなを止めたけど、騒ぎはどんどん大きくなっていくばかりで……

沙帆子は、なんだか虚しくなって、自分が引き受けようと用意されたパネルを掴んで教室を出た。奇異なものを見るような視線を浴び、正直なところ、恥ずかしさでひっくり返りそうになったが、千里と詩織は、すぐに追いかけてきてくれて……

あのときは、本当に、友のありがたみをしみじみと感じた。

三人して、人ごみの中を、パネルを高々と掲げて見世物状態で歩き回ったのだが、前を向いていなかった沙帆子は、校舎の角を曲がったところで、佐原と鉢合わせして思い切りぶつかった。

パネルを持っていたせいでバランスを崩し、倒れそうになった沙帆子を佐原が抱きとめてくれたのだ。あの瞬間は驚きしかなかったが、あとになるほどに、このときの出来事が沙帆子の中で桃色に膨らんでいった。

あのことがあって、彼女の恋心はさらに膨れ上がったように思う。

平謝りする沙帆子に、佐原はクールな顔で「怪我はないか?」と聞いてくれたのだ。言葉はずいぶんとそっけなかったが、それでも佐原に秘めたる恋心を抱いていた沙帆子にとっては、嬉しすぎる出来事であり、特別な言葉だった。

けど、あのとき……

沙帆子は、母親が手にしている口紅を見つめて、記憶を懐かしんだ。

「先生のワイシャツに、口紅つけちゃってるのに気づいたのよねえ」

「いつ口紅なんかつけたのよ?」

口紅を塗ろうとしていた母は、手を止めて問いかけてきた。

「メイドの格好してたとき」

沙帆子は物思いに耽ったまま、上の空で返事をしていった。

「メ、メイド……」

上ずった母の口調に、沙帆子は我に返った。

なんだ?

「ママ、何?」

「コ、コホン」

わざとらしい咳をした美美子は、沙帆子の唇に口紅を塗り、蓋をした。

「終わったわよ」

沙帆子は眉を上げ、鏡に向き直った。

「わおっ!」

お、驚きだ!

沙帆子でない沙帆子がそこにいる。

「わ、わたしじゃないみたい……」

「ほんとね。……高校生には見えないわね」

「お化粧って、すごいね」

「それにしても、あなたってば、メイドの格好までしたの？」

そういえば、両親にはあのメイド喫茶の話はしなかったのだった。母は面白がっただろうが、きつと父はそんなものやるんじゃないと喚わめいて面倒なことになるに違いないと思えて……

「え？ うん。まあ。だって、強制的にやらされちゃったんだもの。仕方ないでしょ？」

「ほんとに、いったい何をしてんだか……ママ、眩暈めまいがしてきちゃったわ」

沙帆子は母の反応にくすくす笑った。いまさら眩暈めまいを起さされても、過ぎたことだ。

いまの沙帆子にとって、メイド話などどうでもいい。このあとのスケジュールが、ずつしりと心に重いものだから。

「ね、ねえ、ママ？」

「なあに？」

「佐原先生のご家族にお会いしたら、わたし、どうすればいい？」

「笑顔で挨拶して……。あとはいつもの沙帆子でいればいいわよ」

「で、でも……」

芙美子は沙帆子の肩に手を置いて、なだめるように何度もゆつくり撫でた。

「相手は、あなたが好きになったひとの家族だけど、好かれないなんて思わないこと」

沙帆子は目を見開いて、ぱちぱち瞬まばたきした。

「ママ？」

「ひとがあなたを好くか好かないか……それは相手の自由。それと、好きなひとの家族なんだから好きにならなきゃ、なーんて思わないこと」

沙帆子は、母親の目をじっと見つめた。

確かに、母の言うとおりだ。好意は自然に生じるものなのだ。人工的に作れるものではない。

「あっ、そうそう」

そう口にした芙美子は、ティッシュを手に取り、唐突に沙帆子の唇に押し当ててきた。

「マ、ママ？」

「こうやとくと、色移りしないから」

色移り？

鏡で確認してみたが、口紅の効果はさほど変わっていないようだ。沙帆子は唇に人差し指を当てて、本当に色移りしないのか確かめてみた。

「ほんとだ。色がついてない」

「さあ、そろそろよ。啓史君、時間に几帳面だから、もう来るわよ」

沙帆子は、母に追い払われるように部屋から出た。

自分の部屋に戻ってバッグを持った途端、朝の目覚めのときから感じていた緊張が、またぶりかえしてきた。

ど、どうしよう……

部屋の中を意味もなく行ったり来たりしていた沙帆子は、玄関のチャイムの音を聞いて飛び上がった。

「はい」と母の軽い返事が聞こえる。母が玄関へと佐原を出迎えに行ったようだが、沙帆子は部屋から出てゆけず、どうにもいたたまれない気分です、その場で足踏みを繰り返していた。

ど、どうしよう？

佐原先生の家族に、なんと挨拶すれば？　なんか失敗したら？　わたし……先生の家族に気に入ってもらえるだろうか？

沙帆子は、ぴたりと思考を止めた。そして自分のおでこを、ゴツンと強めに叩いた。まったく……母に言われたではないか。好くかどうかなど、ひとの自由だと……ママの言うとおりで。……こんなことで思い悩むなんてやめなきゃ。

どんな場所でも、いつものわたしでいけばいい……

「沙帆子、何やってるの？　早くいらっしやい」

ドアが開いて、母が顔を覗かせた。沙帆子は、母に向けて返事代わりに頷き、ドアに向かった。

2 玄関先の談合

玄関先で父と話をしていたらしい佐原は、沙帆子が出てきたのに気づいて視線を向けてきた。

今日もまた、いつもと変わらぬかつこよさで、彼女は頭のとっぺんあたりに衝撃を食らった気がした。

黒いセーターに濃いグレーのズボン。雑誌に載ってるモデルに、マジで負けてない。

角膜が、桃色に染まっていくようだ。

あー、メモリがゼロになるまで写メ撮りたいっ！

無意識のうちにバッグの中の携帯に手を伸ばそうとしている自分にハッと気づき、沙帆子は暴走する自我をなんとか押しとどめた。

心の欲求を押しやり、彼女は自分と佐原の服を見比べてみた。先生とわたしの服、な、なんかいい感じのペアなんじゃ……

いつもと違う自分の姿が、彼の目にどう映っているのか、沙帆子はひどく気になり始めた。

なぜか佐原は、沙帆子を見つめるばかりで何も言わないし、どうしたのか両親も押し黙っている。

奇異な静けさを消し去りたくて、沙帆子は頭に浮かぶ言葉を焦って口にしようとした。「あ、あの……き、今日は……よろ、よろ……し」

そこまで言った沙帆子は、手首を痛いほどの力で佐原に掴まれた。

「へっ?」

「行こう」

「あ、は、はいっ」

沙帆子はこくこくと頷きながら返事をし、少しだけヒールのついたパンプスに足を突っ込んだ。

掴まれた手首の力は、どうしてか緩まない。

「さ、沙帆子!」

父の切羽詰まった呼びかけに驚き、沙帆子は振り返った。

「パパ、何?」

幸弘は沙帆子に向けて伸ばしていた手を少し泳がせ、なぜか気まずそうな顔をしてゆっくり脇に下ろした。

「パパ、どうしたの?」

「いや……。子どもでよくないか?」

幸弘は俯うつむいてそう呟いた。

沙帆子に対する問いかけのようだが、なんと答えていいのかわからず困った。顔を上げた幸弘は、顔をしかめて沙帆子を見つめ、すぐに美美子のほうを向いた。

「美美子ちゃん、僕の可愛い娘はどこに行っちゃったんだよ?」

沙帆子はきゅつと眉を寄せた。

父は何を言っているのだろうか? 可愛い娘はここにいないか?

意味がわかんないし……

「はいはい」

夫の肩を抱いてぼんぼんとなだめるように叩きながら、美美子は沙帆子と佐原に視線を向ける。

「情けないパパのことはいいから、あなたたち、さっさと行っちゃってちょうだい」

美美子はふたりに向けて、しっしっしと追い払うように手を振る。

「美美子ちゃん。悲しんでる僕に、そういう言い方、ないんじゃないかなあ」
妻に不服を訴えている父親を見つめていた沙帆子の手を、佐原は催促するようにぐつと引つ張った。沙帆子は靴を履き終え、玄関を出ながらも一度両親のほうを振り返った。

「いってきます」
挨拶を口にし、小さく手を振っただけなのに、どうしてか父の顔がくしゃりと歪ゆがんだ。彼女は佐原に手を引かれるまま外に出た。

「ふ、美美子ちゃん……いい、いってきますだって……」
玄関が閉まる直前、そんな情けない父の声が聞こえた。

いってきますって言っただけなのに……

おかしい父親の反応に首を捻ひねった沙帆子の目の前に、佐原の顔が現れた。

えっ？

触れるか触れないかくらいに佐原の唇が沙帆子の唇を掠なすめ、そして左頬にぐつと押し当てられた。

そ、外にいるというのに……いいのか？ ……これって許されるのか？

「あ、あ……せ、先生……」

首筋にリアルに唇の動きを感じた。甘い疼うずきに耐え切れず、彼女はきゅーんと身を縮めた。

佐原が上体を起こした。彼女に泡を吹かせた張本人のくせに、彼はいつもと変わりないクールな顔をしている。途端に苛いら立ちが湧いた。

こ、このお。

どうしてこういうことをやらかし、ひとをキyun死じにしそうなほど追い込んでおいて、こんな澄ました顔をしてられるのだ。

む、むかつく……

「今日は、俺のことは啓史と名で呼べよ」

「は？ ……け、啓史？」

「ああ」

「む、無理です！」

沙帆子は、ぶるぶると首を激しく振った。

「いま呼んだろ」

そ、それは呼んだとは違うと……

「まあ、佐原でもいい。ただし、先生とは呼ぶなよ。おかしいことになる」

それはまた……

「む、難しい……課題で……」

「俺は、呼び捨てにするから」

佐原はそつげなく宣言した。
それは、「榎原」と呼ぶのではなく、名を呼び捨てにするぞということだろうか……
やはり。

これは大変なことになったかもしれない。
佐原に沙帆子と呼ばれて、普通の反応ができる自信は……
ない！

「あ、あの。佐原先生、少し練習させてもらっていいですか？」
佐原がぐっと眉を寄せた。

何か、まずいことを言っただろうか？

「練習？」

め、目が……き、きょわい……

「な、慣れておいたほうがいいかなあ〜って」

「こういうのって、練習とかするもんじゃないだろ？」

「そんなこと言わずに、呼んでみてください。お願いします。慣れる努力しますから」

「呼べ？……いま呼べってのか？」

「はい。お願いします」

沙帆子は丁寧に頭を下げた。

「嫌だ」

即座に拒否した佐原に、沙帆子は戸惑った。

「え、ど、どうして？」

「それじゃ、お前、俺の名前呼んでみる！」

「えっ……」

沙帆子は顔が固まった。

む、無理……

首を横に振る沙帆子に、佐原が冷たい目を向ける。

ひ、ひよええ〜。

「慣れたいつて言ったのはお前だぞ。俺は必要に応じて呼べるんだからな」

「せ、先生はそうかもしれないけど……わたし、呼ぶのもだけど、呼ばれるのにも慣れたいんです」

「はあ？」

「だから、呼んでみてください。お願いします。できれば十回くらい連続で……」

おでこめがけて勢いよくげんこつが飛んできて、沙帆子は慌てて両手で防御の構えを取った。だが、本気ではなかったようで、げんこつは軽く手の甲に当たっただけだった。

「馬鹿か、お前」

「なんで馬鹿なんですかあ？ 名前で呼んでみてくださいって言うだけじゃないですか。それで怒るなんて、先生、意味わかんないですよ」

「お前、自分のこと棚に上げやがって」

険悪な表情になった佐原を見て、沙帆子はびびった。

「わ、わたし？」

「なら、俺の名前、呼んでみろよ。十回連続で」

さ、佐原先生の名前を……？ む、無理。

一度だって呼んだことないのに……できるわけがない。

沙帆子は小刻みに首を横に振った。

「おまえな、名前を呼ぶだけだぞ。簡単なことじゃないか」

「わ、わたしには簡単じゃないって言うてるんです。だからまずは呼ばれるほうを練習させて欲しいってお願いしてるのに……先生、わっかんないひとですねえ。……あつ、ががっ……」

佐原が沙帆子の口の端に指を突っ込んできて、あるうことか、左右にぐっと引っ張った。

「さはへんへい……いはい、いはいへふ」

「この野郎。いま、どの口が言った？ この俺に対して、おごった口ききやがって」

「ほ、ほへって、ひほくないへふかあ」

「あんたたち……」

その声に、佐原と沙帆子は同時に振り返った。

玄関のドアが開き、母親が姿を見せていた。父もすぐに姿を見せた。

「まだいたのか？」

幸弘の言葉のあと、沙帆子の両親は、いたぶられている娘と、娘をいたぶっている佐原を、無言でじっと見つめてくる。身支度の様子から、どうやら父も母も、これからお出かけのようだった。

「これは……その……」

固まっていた佐原は、顔を引きつらせてそう言いながら、気まずげに沙帆子の口からゆっくりと指を抜いた。

「つまり……ちょっとした打ち合わせを……」

「打ち合わせって？」

「打ち合わせだ？」

美美子と幸弘が声を合わせた。シンとした場に、おかしな空気が流れ始める。

「い、行くぞ。榎原」

「は、はい。佐原先生」

ふたりは、その場からそそくさと逃げた。

3 無謀な指示

「あの、ど、どのくらいで着くんですか？」

車が走り出してすぐ、沙帆子は余裕なく佐原に尋ねた。沙帆子の不安そうな表情に、佐原が顔をしかめた。

「緊張なんか、する必要ないぞ」

その少し叱るような口調に、沙帆子はむっとした。

何も好き好んで緊張しているわけじゃないのだ。自然とドキドキして、気持ちが悪く張り詰めてくるのだ。なんだか、血液が身体にうまく回っていないように感じるし、このままでは頭も機能しなくなりそうだというのに……

「必要とか、必要ないとかじゃないんです」

佐原の家族に、とんちんかんな返事とかしたら……それどころか、とんちんかんな返事をしたことにすら気づかなかつたりしたら……ど、どうしよう……

沙帆子は、泣きそうな顔を佐原に向けた。

「じゃあ、ずっと緊張してろ」

ハンドルを握り、前を向いたまま、佐原はそつげなく言い捨てた。情のない言葉に、沙帆子の不満が噴き出した。

「つ、冷たくないですかあ」

「俺の言ったことに反論しといて、他に何言えってんだ？」

「だって……い、意地悪です……先生」

「先生？」

佐原の警告のような声を耳にして、沙帆子はびくりとして身を引いた。

先生と呼ぶなどということだろう。

「す、すみません」

沈黙が続いた。助手席に座り、気まずい思っているのと、ようやく佐原が口を開いた。

「あんまり……緊張されると、連れてゆけなくなる」

「はい？」

運転している佐原に、沙帆子は視線を向けた。眉を寄せた佐原は、苛立ったようにハンドルを指先で叩いている。佐原の視線が、一瞬、沙帆子に向けられた。

「だが、先延ばしできるほど、日数の余裕がない」

沙帆子は渋々同意を込めて頷いた。佐原の言うとおりだ。すでに、結婚式まで二週間。先延ばしなどできないのだ。佐原の両親や家族だって、佐原と結婚する相手がどんな人

間か知りたいたらう。そう考えた途端、先ほどの緊張が、そのまま舞い戻ってきた。ど、どうしよう……

沙帆子を品定めして、大反対される可能性だつてあるのだ。

「実を言うと、まだ結婚のこと、知らせてないんだ」

「ふえ？」

意外な言葉に、沙帆子は目を見開き、佐原の横顔を見つめた。

「で、でも。それじゃ、お会いした途端、言うつもりなんですか？」

沙帆子の頭に、佐原の家族と顔を合わせた場面が浮かび上がった。

はじめましての挨拶のあと、佐原から、俺、こいつと結婚するから、と爆弾発言を食らったら、どんな相手であれ、ひっくり返るんじゃないだろうか？ それこそ、そんな話あるかと大激怒の上に、大反対されるかも……

そ、その渦中かちどに……身を置くことになるのか……わたし？

ひ、ひよえええ。

「そのへん、俺がうまくやるから。……とにかく俺に任せといてくれ」

自分の妄想に恐れをなし、座席に身を沈みこませていた沙帆子は、顔を固めたまま、佐原を振り仰いだ。

な、なにを……どううまくやるつもりなのだろう？

よくわからなかったが、任せておいてくれという佐原の言葉で、ほんのちよっぴりだ
 が気が楽になった。とにかく、はじめに会った段階では、家族は沙帆子と佐原の二週間
 後の結婚式を知らないということなのだ。

「あの、せん……コ、コホンコホン」

思わず先生と呼びそうになって、沙帆子はわざとらしい咳で誤魔化した。

「佐原……さん？」

お伺いを立てるように沙帆子は呼びかけた。とてもじゃないが啓史さんとは口にでき
 ない。

佐原は沙帆子を「暫いちべつし、無言のまま前を向いてしまった。一応、合格ラインというこ
 とらしい。

「なんだ？」

ほっとしたところに、佐原から逆に問いかけられ、沙帆子はためらいながら尋ねた。

「わたしのこと……つまり、みなさん、まったくご存知ないってことなんですよね？」

「まあ、そうだ」

佐原の肯定に、沙帆子は眩暈めまいがした。結婚を告げていないと聞いたあたりから、たぶ
 んそうではないかと思っただけ……

これでまた、ただでさえ飛び越えられないハードルが、目の前でグンと高くなった気

が……

「心配するな。問題はない」

きっぱりそう言った佐原は、さらに言葉が続けた。

「電話で告げるのでは、話が中途半端に伝わりやすい。実際、顔を合わせて話したほうがすんなりいくに決まっている」

すんなり……本当に、すんなりいくのだろうか？

沙帆子はそれ以上言葉を見つけれず、会話はそこで終わってしまった。

佐原の家に着くまでの間、沙帆子はもんと考え込んだ。

彼が沙帆子と結婚することにしたのは、引越しも転校もしたくない沙帆子に対するやさしさだけなのだろうか？

いくら心根のやさしい佐原でも、それだけで、結婚式まで挙げたりしないんじゃない……つ、つまり……佐原は沙帆子を……教え子とかでなく……結婚してもいいくらい好きだという結論に……

沙帆子は顔をしかめた。そんな都合のよすぎる結論、心が受け入れてくれない。

佐原が沙帆子に恋心を抱いているなんて、彼女にはチラとも感じられないし、だいたい愛してるところか、好きの一言もないし……

運転している佐原に、沙帆子は何気なさそうに視線を向けてみた。

こんな風に考え込んでも答えなど出ないし、勇気を出して聞いてみようか？
ス、ストリートに、わたしのこと好きですか？

沙帆子は唇を噛み締め、両手をぐっと握り締めて、必死にファイトを燃やした。
よ、よし！

「あ、あの、先生。わ……」

「違うだろ」

「へっ。は、はい？」

「呼び名。気をつけるよ。もうそこだぞ」

「えっ？ 気を……も、もおっ？」

「ああ。あの角、右に曲がった先だ」

「どっ、どっ、どっ、どーしようおお！」

沙帆子は思わず震え上がって叫び声を上げた。佐原は何も言わず、車は右へと曲がった。
「せ、先生。止めて、止めて、いっぺん止めてください。深呼吸して落ち着くからっ」

「ばーか」

そっけない言葉を無情に吐き、佐原は車を目的地へと走らせていく。

土壇場になったいま、動揺全開の沙帆子は、気分が悪くなるほど首を左右に振って、

周りを眺め回した。前方の右側に、ずいぶん可愛らしい建物を発見した沙帆子は、動揺を抱えながらも興味の間を向けた。喫茶店か何かのお店のようだ。緑色の屋根、洋風の造りをしたその建物は、平屋で素敵な庭がついていた。

「先生、見て、見て、すごい可愛い喫茶店がある」

「え？」

佐原は沙帆子の指さす方向へ視線を転じて、「ああ」と呟いた。

考えてみれば、ここは佐原の家の近くだ。いまさら見なくても、彼は知っているのだ。突然、佐原の車が止まった。

「どうしたんですか？」

目的地に着いたわけではない。車はまだ路上だ。

「いや」

前を見つめている佐原の視線を沙帆子は追った。前方からやってきたシルバーの車が、沙帆子たちの車の横で唐突に止まった。

運転席には若い男性が乗っていて、ふたりを見つめている。どうも佐原の知り合いのようだ。

佐原は窓を開けて、その男性に呼びかけた。

「お前、ここに停めるんだろ？」

「あ……ああ……の、つもりだけど……」

なんだか、引きつったような顔で相手が言った。彼は、なぜか沙帆子を、恐れをなしたような目で見ている。沙帆子は相手に向かって小さく会釈をしたが、返事はなかった。

「それじゃ、俺、向こうに停めるから」

「あ、ああ」

目を見開いて沙帆子を見つめている男性を置き去りにして、佐原は車を進めた。

「すぐそこにある駐車場に停めるから」

「はい」

佐原の言葉に、沙帆子は素直に答えた。あの男性は、あまり佐原に似ていなかったが、弟なのかもしれない。だが、佐原にそれを問うことよりも、沙帆子はその男性の反応が気になってならなかった。

車は会社のようなビルが建っている敷地に入り込み、佐原は門に一番近い場所に駐車した。

「いまのひとって、せ……えー佐原、さ、ささんの……」

「お前な、普通に呼べよ」

「えっ。先生って呼んでいいんですか？」

途端に佐原のげんこつが飛んできて、彼女のおでこの前で止まった。防御できなかつ

た沙帆子は、ぎゃつと叫んでこぶしを見つめた。げんこつは彼女のおでこに当てられ、佐原はそのままぐっと押しつける。沙帆子は椅子の背もたれの許す限り、後ろにのけぞった。

「んなわけないだろ！」

「じ、じゃあ、どんなわけで？」

「佐原さんなんて、呼びづらいだろ？」

「それはもう」

「だから、啓史さんって呼べ」

佐原はあつさり言ったが、それは無謀むぼうというものだ。そうは思ったものの、沙帆子は佐原の鋭い睨みに負けて、「はい」と答えた。

4 ふて腐れた眩き

車を降りた沙帆子は、目の前のビルを見上げた。五階建てくらいの白っぽい建物だ。敷地は広く、ビルに隣接して二階建ての大きな建物がある。

「あの、ここに車停めてよかったですか？」

「ああ。行くぞ」

佐原はあつさり答え、門を出ていく。

「先生のお宅は、さっきの方が車を停めた家なんですか？」

「そうだ」

大股で歩いていく佐原に、沙帆子は急ぎ足で横に並び、彼を見上げた。

「さっきのひと、先生の弟さんですか？」

「ああ。順平じゅんぺいっていう。ちなみに兄貴は徹てつ」

「あの、わたし……おかしいですか？」

「おかしい？」

佐原は少し歩みを緩ゆるめて、沙帆子を見下ろす。じつと見つめられ、その視線に心臓がドキドキする。

「まあ、完全否定はしないが……」

佐原の言葉に、沙帆子はあわあわしつつ、自分の身体をあちこち見て、最後に顔に手をあてた。

「や、やっぱり」

もしかして、この化粧に無理があつて、とんでもなく違和感を与えませんか？

「ど、どこがおかしいんですか？ 顔？ 顔ですか？」

「何を焦ってる。冗談だ」

「え？ でも、順平さん、わたしのこと見て……」

「おい！」

まだ話が終わっていないというのに、佐原に重い声で呼びかけられ、驚いた彼女は言葉止めた。

「は、はい？」

「お前、なんで順平のことは、すんなり呼んでんだ」

「えっ。名前を呼んじゃ、いけなかったですか？」

「俺のことは、まともに呼べないくせに」

本気で怒りをあらわにしてしている佐原を見て、沙帆子は困って唇をすぼめた。

それは恥ずかしいからに決まっている。佐原にはそれがわからないだろうか？

「だって……」

先ほど目にした可愛らしい建物が視界に入り、沙帆子は言葉を止めて笑みを浮かべた。

「先生、見てほら、やっぱり可愛い」

沙帆子は庭を指さし、佐原の袖を掴んで引つ張った。

「お庭も素敵。見て見て、小人さんがいるし、くまとか、ほらっ、うさぎさんも」

愛くるしいうさぎの置物を見つけて、沙帆子は興奮して叫び声を上げた。

「そんなに気に入ったなら、もらって帰れ」

まるで吐き捨てるように言う。

「何言ってるんですかあ。お店のもの勝手に取れませんよ」

「ここは、店じゃない」

「はい？ ここ、お店じゃないんですか？」

「ああ。俺の両親の家」

沙帆子は、時が止まったように微動だにしないまま、佐原を見つめた。

「はいー……い？」

耳にしたことが信じられなくて、沙帆子の声はとんでもなく跳ね上がった。そんな沙帆子など無視して、佐原は敷地の中へ入っていく。

「せ、先生。これは何かの間違いじゃ」

沙帆子は慌てて佐原に飛びつき、彼を引き止めた。

「お前な、自分の家、間違えるわけないだろう」

そ、それはそうだ……

「で、でも……似合っていないっていうか」

「何が？」

思わず口を滑らせてしまった。佐原と、この家が……とは、命が惜しくて口にできない。

「え、えーとですな」

「だから、ほんとだつて。もうきつと来るよ。ほ、僕、見たんだからさ」

誰かの話し声が聞こえ、沙帆子は家の玄関に視線を向けた。

玄関のドアがほんの少し開いていた。

「順ちゃん、前にもそれと同じようなネタでわたしをからかって、大笑いしてたわよねえ」
順ちゃん？ さっきの先生の弟？ とすると、相手の女性の声は、先生の、お、お母さん？

一瞬で緊張が増した。

「だからさあ、これは騙しじやないって。もうわっかんないなあ。あれだつて、もう二年以上も前の話だし……」

「ふん。啓史さんはね、飯沢君を連れてくるって言ったのよ」

佐原の母と思われるひとが、はつきりと言った。沙帆子は思わず隣にいる佐原を見上げた。彼は彼女に向けて首を振り、母の言葉を否定した。

「兄貴、ほんつとに、飯沢さん連れてくるって言ったの？」

「言ったわよ」

はつきりと宣言するような声だった。

「言つてねえつて」

沙帆子の隣で、佐原はため息まじりにそう呟いた。

佐原がすつと動き、ドアを開けた。

「うわっ」

ドアにもたれかかっていたのだろう、半分転がるように佐原の弟が外に出てきた。沙帆子を目にした順平は、ぎょつとしたように目を見張り、ひどく焦った様子で体勢を立て直した。

「飯沢を連れてくるなんて、俺、言った覚えはないけど」

「あ、あら、啓史さん。おかえりなさい。ふふ、順ちゃんがわたしのこと騙すから、ついね」

「だから、騙してなんかいないって」

開いたドアに向かって怒鳴った順平は、沙帆子にちらりと目を向けて、ひどく気まずそうな顔をした。

照れてる……のかな？ どうもそんな感じだった。

「それで、啓史さん、どなたをお連れしたの？ お昼はお任せでいいってことだったけど、イタリアンでいいのかしら？」

「昼飯はなんでもいい」

佐原は、母のおしゃべりに蓋をするように言うと、自分の背中に張りついている沙帆子に向き直り、腕を伸ばした。

「紹介するよ」

沙帆子に心の準備もさせぬまま、佐原はぐっと彼女を母親の前に押し出した。

「榎原沙帆子。俺の彼女」

「ほ、ほら、ほらあ〜」

順平は、沙帆子と自分の母親を交互に指さして喚わめいた。

「か、かの……彼女って、彼女？」

佐原の母はひどく驚いたようだ。

「あの、はじめまして」

沙帆子は頬を赤らめて、ぴよこんとお辞儀をした。

「あ……ええっと」

沙帆子も緊張のせいではないぶんと舞い上がっているのだが、佐原の母は、彼女以上に

舞い上がっているように見えた。

「上がっていいかな？」

「あい。はい。上がる？ 彼女？ 彼女？ 啓史さんの？」

「母さん、落ち着けよ。沙帆子が困るだろ」

さ、沙帆子！

「さ、沙帆子……さん？」

佐原の母は、すらりとした背の高いひとだった。だが、佐原とはあまり似ていない。弟の順平に似ているようだ。

佐原の母のパニックぶりに緊張が吸い取られたのか、沙帆子のほうはかなり落ち着きを取り戻していた。

「まあ。まあ、まあ」

「母さん」

母親の不具合を修正するかのよう、佐原は呼びかけた。それが効いたらしく、佐原の母親は一度口を閉じ、それから、はーっと思いつき息を吐いた。

「ごめんなさい。でも……驚くでしょう？ 突然すぎるわよ、啓史さん」

佐原の母は顔をしかめ、責めるように佐原に言う。

「とにかく、上がらせてもらうよ」

母の言葉をすんなりかわし、佐原はスリッパを沙帆子の前に並べた。

「ありがとうございます。……啓史さん」

佐原の名前をすんなり口にできた自分に、沙帆子は驚いた。これも、佐原の母の動揺のおかげかもしれない。思わず彼女は佐原の顔を見上げ、褒めて褒めて光線を発しつつ微笑んだ。

「ああ」

佐原のいつもと変わらない反応に物足りない気分を味わいつつも、沙帆子は家に上がらせてもらった。

「親父は？」

「書斎で本を読んでいると思うけど……」

「そう」

「パパ、呼んできて、順ちゃん」

「おー」

力強い返事をした順平は、一度沙帆子のほうを振り返り、視線が合うと慌てて顔を背け、パタパタとスリッパの足音を響かせて、家の奥に消えた。

沙帆子は佐原についてダイニングらしい広い部屋に入った。南側に大きな窓ガラスがあり、明るい日差しをふんだんに部屋に取り込んでいる。彼女は窓に歩み寄り、外の景色を眺めた。

「わあっ、素敵です」

季節がひと月ほど動いたら、緑の息づいた春の景色に染まるのだろう。

「喫茶店じゃなかったけどな」

そのからかいに、沙帆子は不服を込めて佐原を見上げた。

「わざわざ言わなくても」

頬を膨らませた沙帆子の抗議に、佐原がぶつと吹いた。

「あのおー」

遠慮がちな声が後ろからかけられ、ふたりは一緒に振り返った。自分の家だというのに、居心地悪そうに佐原の母が立ちつくしている。その目は、佐原に救いを求めているように見えた。

「母さん、お茶でも用意したら？ 落ち着くんじゃないか？」

「そ、そうね。そうよ」

佐原の母は、パンと手を叩き、頷いてキッチンに入っていった。

「なんだかずいぶん驚かせちゃったみたいですね」

「予想してなかったことだろうからな」

沙帆子は、少し笑いが込み上げてきた。

「お母様には申し訳ないんですけど、おかげでわたしのぶんの緊張、かなりほぐれました」

「そうか。よかったじゃないか」

苦笑まじりの佐原の返事に、沙帆子は笑みを返した。

佐原に勧められてソファに並んで座り込んだ沙帆子は、部屋をゆっくり見渡した。途中、対面式のキッチンの向こうにいる佐原の母と目をばっちり合わせてしまった。彼女

は小さく会釈したが、佐原の母は困ったように視線を外してしまった。その反応に沙帆子は少し不安になった。

ただ驚いただけならいいのだが……

第一印象で、わたし嫌われてはいないよね？

「ずいぶん、可愛らしいお宅ですね」

佐原に顔を向け、沙帆子は心にある不安を揉み消しながら尋ねた。

「お袋の趣味。親父が夢を叶えてやったってとこ」

沙帆子は、感嘆を込めて息をついた。妻の夢を叶えてあげるだなんて……

「素敵ですね」

佐原の父は、とんでもなくやさしいひとらしい。内面がとてやさしい佐原に、似ているのかもしれない。だが佐原は、沙帆子のためにと、自分の趣味に合わなそうな、こんなメルヘンチックな家を建ててくれるとは思えない。

彼女の中で佐原の父のイメージが固まった。きっと、アットホームな、お腹がぼっこり膨らんだ、クマのパパみたいなひとなのだ。会う前から沙帆子は強い好意を抱いた。

「先生の弟さんは、ここで一緒に住んでるんですよね？」

「ここは両親だけの家なんだ」

「そうなんですか？」

「二世帯住宅みたいに、奥のほうで元の家にくつついてる」

元の？ あっ、そうか……

「弟さんが車を停めた家ですね」

「ああ」

こちらは両親だけの家とはいえ、食事は家族一緒にここで食べるのだろう。

「いらっしやい」

佐原によく似た、そっけない響きの声が聞こえた。

せ、先生の父親だ。

クマでも、パパといった感じでもなかった。……クマさんなんかでなく、ウルフとしか言いようがない。残念なくらい、佐原にそっくりだった。

急いで立ち上がった沙帆子は、ぺこりと頭を下げた。

「おじゃましています。榎原沙帆子と申します」

「啓史の父の宗徳です。どうぞ座って」

声のトーンも、顔も、せ、先生にそっくりかも……

「沙帆子、座れば」

佐原の言葉に、立ちつくしていた沙帆子は急いでソファに座った。佐原の父の宗徳は、沙帆子たちの前に、存在感ありありで腰かけた。

このあとは、佐原と宗徳の静かな会話が続いた。仕事の話らしかったが、専門用語が行き来し、沙帆子にはちんぷんかんぷんだった。

「どうぞ」

佐原の母が、みんなの前にカップを置いた。コーヒーのようだ。沙帆子のソーサーには、ミルクと砂糖が添えてあって、彼女はほっとした。

「啓史さん、はい」

みんなに配り終え、最後に佐原の前に洒落た形の灰皿を置く。

「外で吸ってね」

習慣化した言葉のように、佐原の母は告げた。佐原は上半身を心地悪げに動かし、なぜか沙帆子をちらりと見てひどく顔をしかめると、視線を灰皿に向けてむっとしたような声を出した。

「やめたんだ」

「えっ？」

佐原の母は驚きの声を上げ、目を見開いた。佐原の父も、ウルフながら驚いたような表情を浮かべている。

「な、なんて？」

「だから、やめたんだ」

「やめた？ やめたの？ほんとに？」

「ああ」

佐原は迷惑そうに返事をし、コーヒーの入ったカップを持ち上げた。

「絶対やめないって、あれほど吼えてたのに？」

「吼えて？」

咎めるような佐原の眼差しと声に、佐原の母は気まずそうな表情になった。

「こ、言葉のあやよ、啓史さん、あや」

「……やめたらつてうるさく言ってたろ。やめたんだから、いいだろ、それで」

「でも、な、なんで？ どうしてやめられたの？」

「もういいだろ！」

苛立ちを込めて切り捨てるように佐原が言い、佐原の母はぎよっとして口を閉じた。

「啓史！」

佐原の父が、鋭く諭すように佐原の名を呼び、佐原はむすっとして眉間に皺を寄せた。

「どうでもいいだろ。……理由なんて」

「そうだな」

それまで沙帆子の存在を気にしていない様子だった佐原の父が、彼女のほうを向いて口を開いた。

「煙草は、平気かな？」

「え？ わたし？ 煙草ですか？」

「父さん！」

佐原らしくない焦りを帯びた声に、佐原の父は吹き出した。

「啓史さん……でも、もしかして、この方のためにやめた……とか？」

そう言ったのは佐原の母だった。途端に、佐原は何かを喉に詰まらせたような顔になった。

えっ……でも、まさか？

「そうらしいな」

佐原の父が言った。佐原が愉快がっているときと、同じ笑みを浮かべている。

「最悪」

ふて腐れたように眩いた佐原の顔は、驚いたことに、ほんのりと赤く染まっていた。

5 ありえない偶然

「久美子、昼の支度があるんだろ？」

佐原の父親は、妻に向けてさりげなく切り出した。

「え？ ……え、ええ。そ、そうだったわ」

佐原の母親は、険しい顔でコーヒーカップを睨んでいる息子をもう一度目に収めてから、キッチンに向かおうとした。

「あ、あの」

沙帆子は急いで立ち上がり、佐原の母に呼びかけた。

「はい？」

「お手伝いさせてください。お昼の支度……もし、よかったら……」

佐原の母の表情に色濃い戸惑いを見て、沙帆子の言葉は尻すばみに小さくなった。

「あ、あら。ど、どうしましょう」

うわずった声で言いながら、久美子は助けを請うように夫に目を向けた。宗徳は、妻を見返して眉を上げた。

沙帆子は、ひどく気まずかった。どうやら出過ぎたことを言ってしまったようだ。

「ご迷惑なら……」

そう言ってソファに座ろうと腰を落としかけた沙帆子は、佐原にぎゅっと手を掴まれた。

「母さん！」

佐原は鋭い目つきで母に怒鳴った。
「ち、違うのよ」

久美子はびくっと肩を跳ねさせ、訂正するように慌てて言う。佐原と佐原の母のやりとりに、沙帆子は青くなった。

ど、どうしよう……わたしの出過ぎた言葉のせいで……

「あ、あの」

「啓史！」

焦りに駆られて発した沙帆子の言葉に、宗徳の声が重なった。強い呼びかけに、佐原は父のほうに顔を向けた。

「久美子を当惑させているのは、お前だぞ」

佐原の目から鋭さが消え、彼は口を引き締めた。

「ごめん」

佐原の口から謝罪の言葉が出た途端、沙帆子の悔いは倍ほどにも膨らんだ。

すべてわたしのせいだ……

「すみません。わたしが差し出がましいこと……」

「そ、そうじゃないのよ」

久美子は焦ったように、両手を激しく振った。

「沙帆子さんは、ちっとも悪くないのよ」

そう言った久美子は、迷うように視線をさまよわせていたが、最後に宗徳の隣に腰を下ろした。

「驚いちゃって……だって、あんまり急だったから……」

落ち着かない様子で、それでも笑みを浮かべながら久美子は言った。

「すみません」

「いいの。いいのよ。なんていうのか……すごく突然で……それで、その、どうしているのか頭が回らないっていうか……」

そう言いながら、久美子は急に涙ぐんだ。

「ご、ごめんなさい」

慌ててエプロンの端で涙を拭く妻の膝を、宗徳がぼんぼんとやさしく叩いた。

「わかってる」

その言葉をかける夫の目を見た久美子は、泣きながらおかしそうに口元を歪めた。どうも、自分自身に対して、笑いが込み上げたようだった。

「啓史さん、宗徳さんに性格そっくりで、こういう方面、ほんと不器用そうだから……」

「母さん。やめてくれよ」

「いいじゃないか」